



# 麻疹の発生状況

国立感染症研究所・麻疹対策技術支援チーム



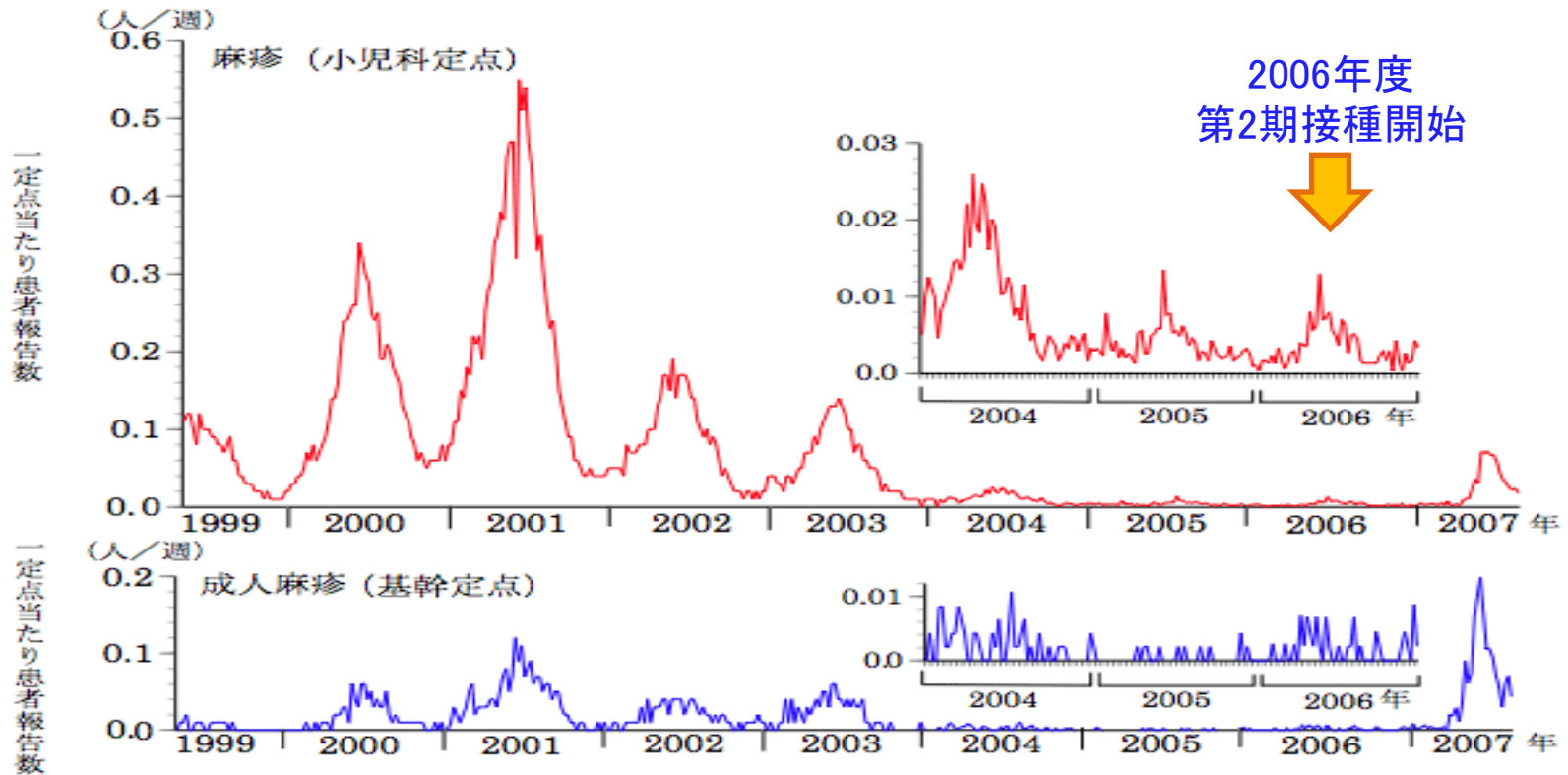
# 発表の内容

- 麻疹の定点報告数の推移
- 全数把握疾患へ変更(2008年1月)以後の発生動向
  - 背景
  - 週別報告数の推移
  - 人口百万対報告数の推移
  - 年齢別報告数の推移
  - 病型別報告数の推移
  - 麻疹「輸入」例の推移
- 人口動態調査における麻疹が死因となった死亡者数の推移



# 麻疹週別定点報告数の推移 1999年～2007年

図1. 麻疹・成人麻疹患者報告数の推移(定点当たり), 1999年第14週-2007年第31週



(感染症発生動向調査: 2007年8月8日現在報告数)

**IASR**

Infectious Agents Surveillance Report

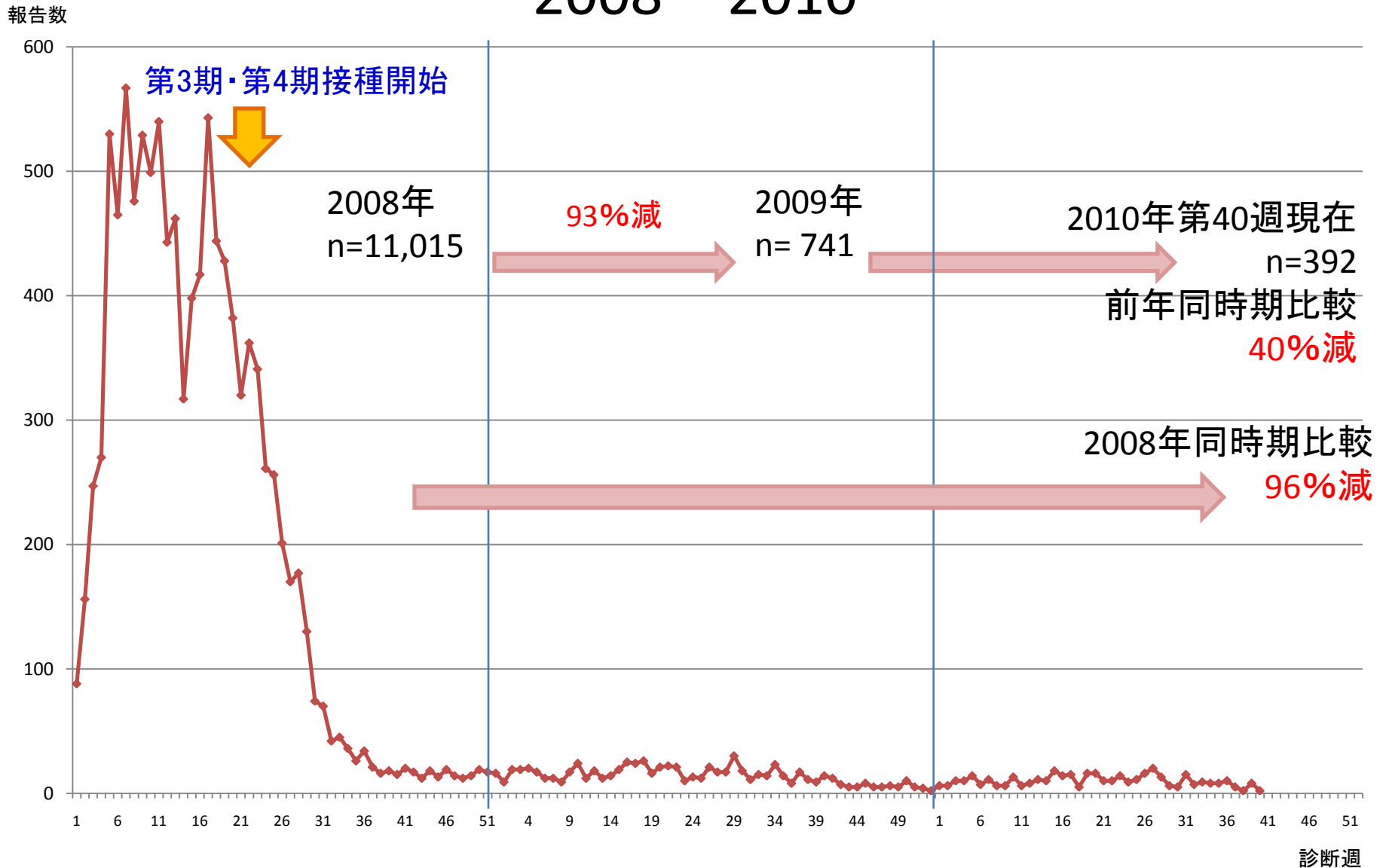


# 発生動向調査における変更点

- 日本を含む世界保健機関(WHO)西太平洋地域の加盟国:2005年9月の年次総会において2012年までに麻疹排除を達成させることを決議。
- 厚生労働省:2007年12月、「麻疹に関する特定感染症予防指針」をとりまとめ、2012年度までに麻疹排除達成することを正式に国の目標とすると発表。
  - そのための施策の一つとして2008年1月より、麻疹は五類定点報告疾患から五類全数報告疾患となった。
  - 【病型】臨床診断例:発熱・発疹・カタル症状すべて
  - 検査診断例:上記3症状＋検査診断
  - 修飾麻疹:いずれかの症状＋検査診断



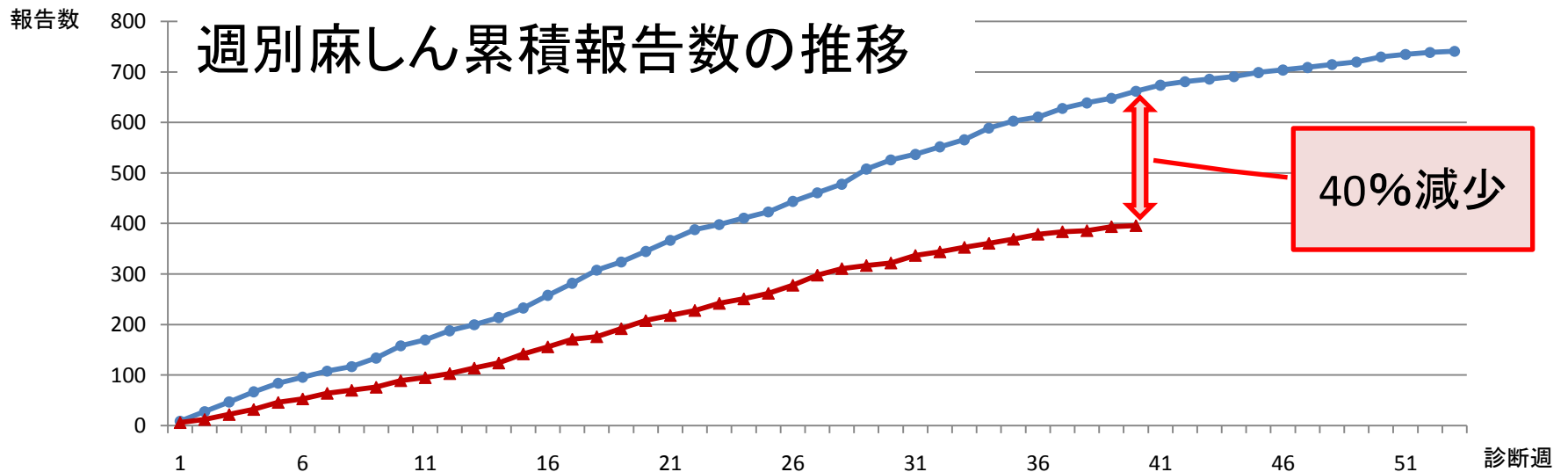
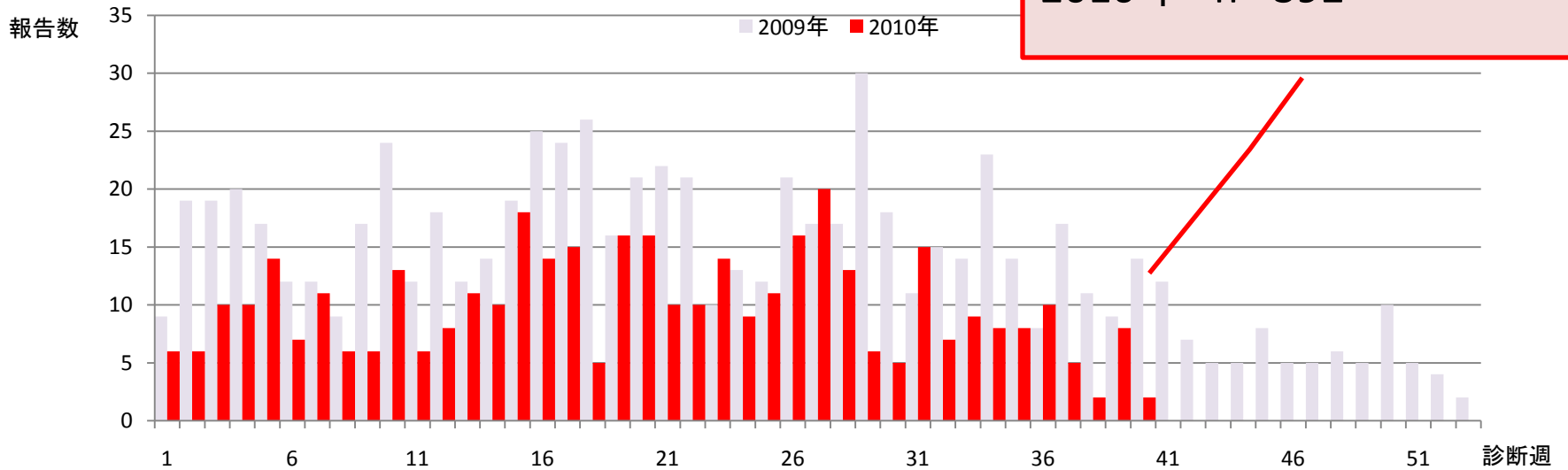
# 週別麻疹報告数の推移 2008～2010





# 2009年～2010年第40週 週別麻疹報告数の推移

2009年 n= 662(第40週時点)  
2010年 n= 392

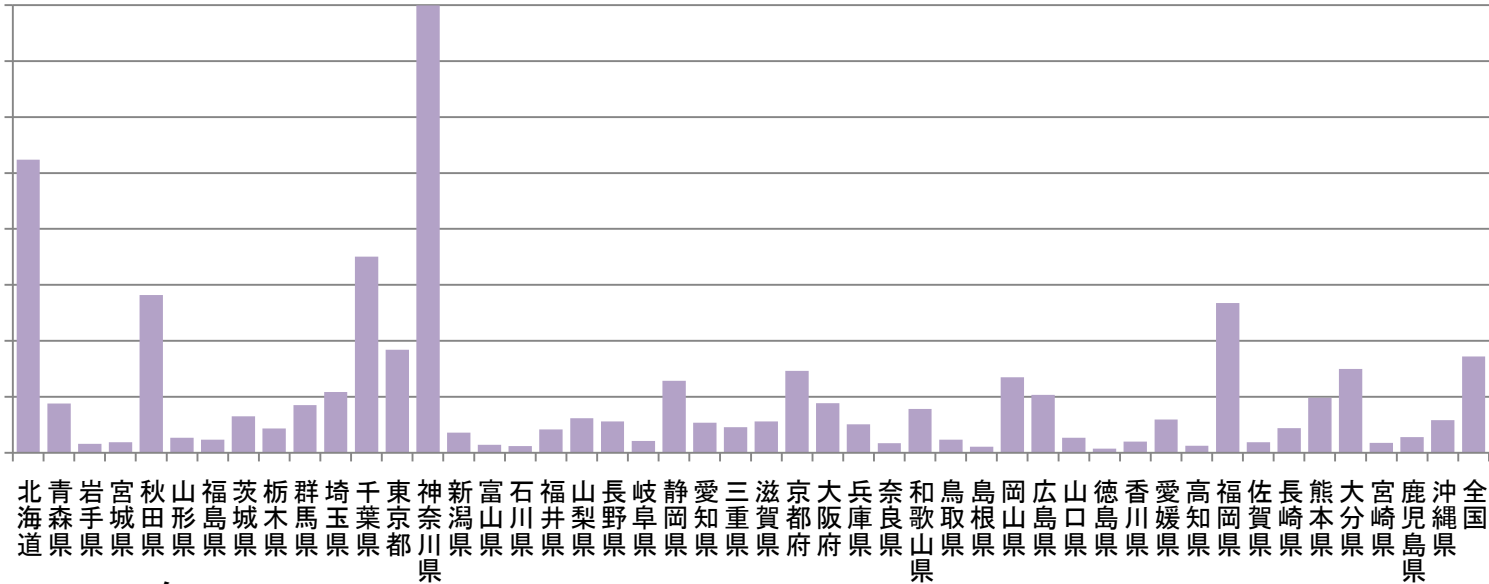




# 都道府県別人口百万対麻しん報告数

2008年

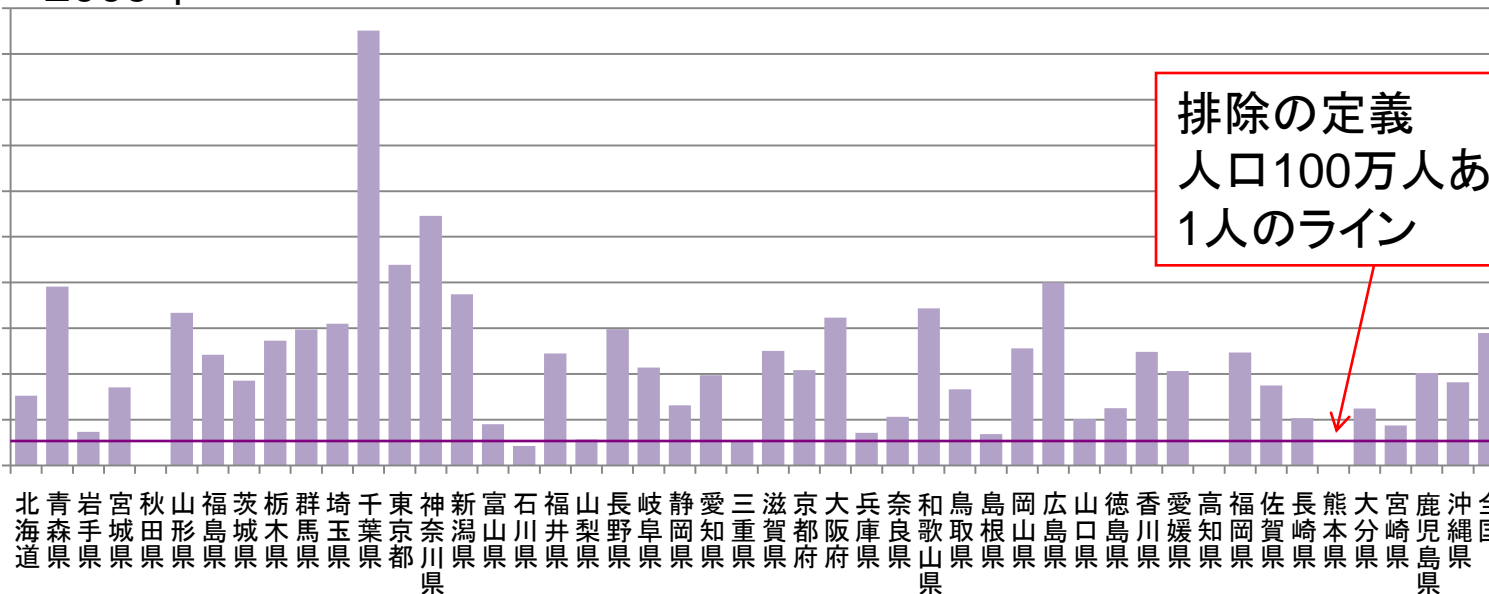
人/百万  
400.00



\*注  
スケールは1/20

2009年

人/百万  
20.00

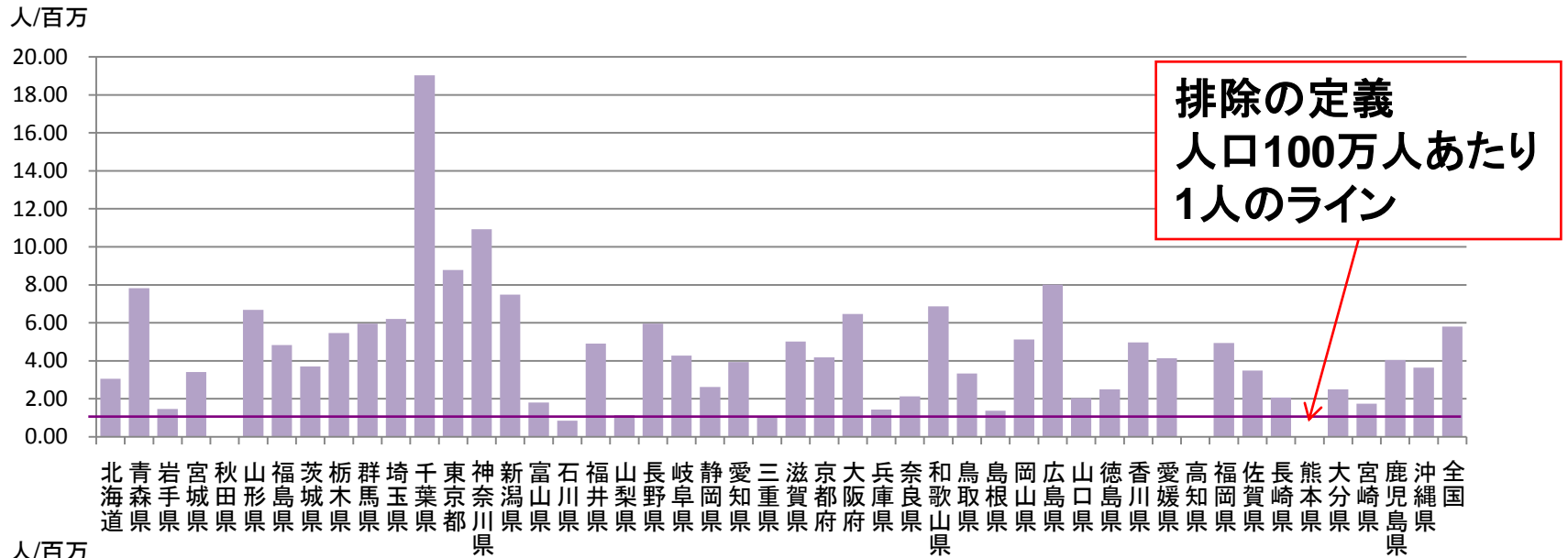


排除の定義  
人口100万人あたり  
1人のライン

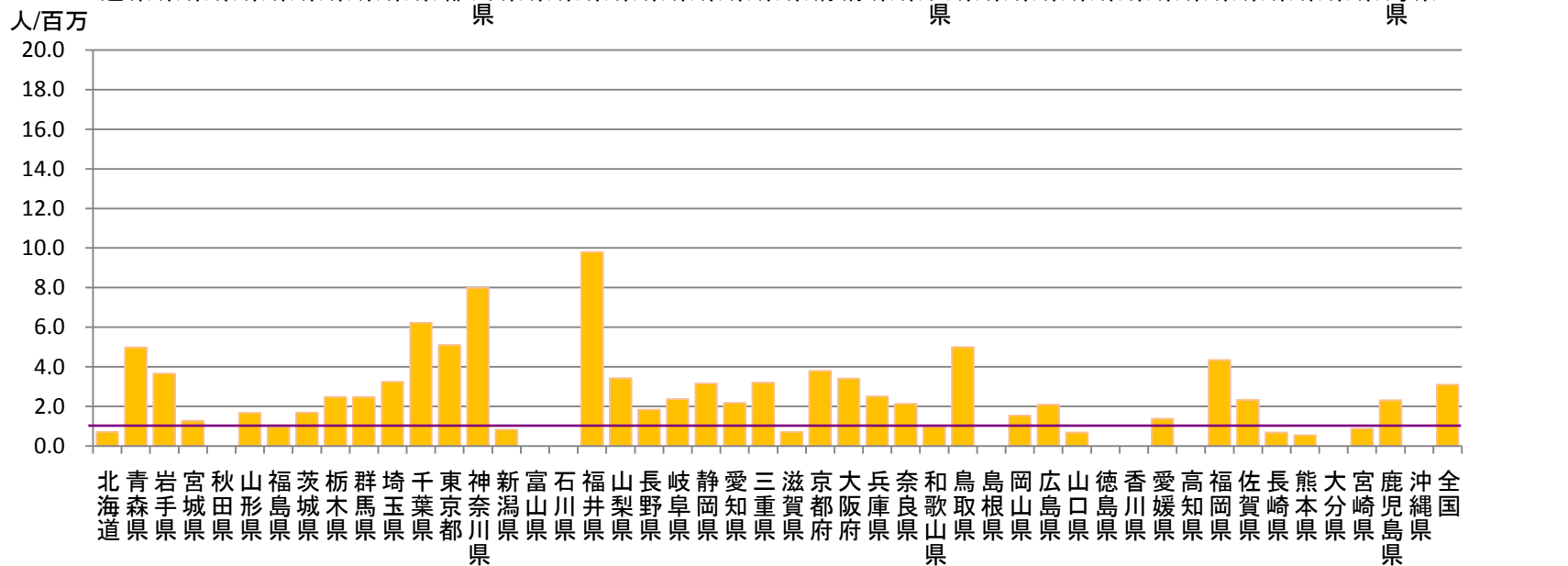


# 都道府県別人口百万対麻しん報告数

2009年  
(再掲)



2010年

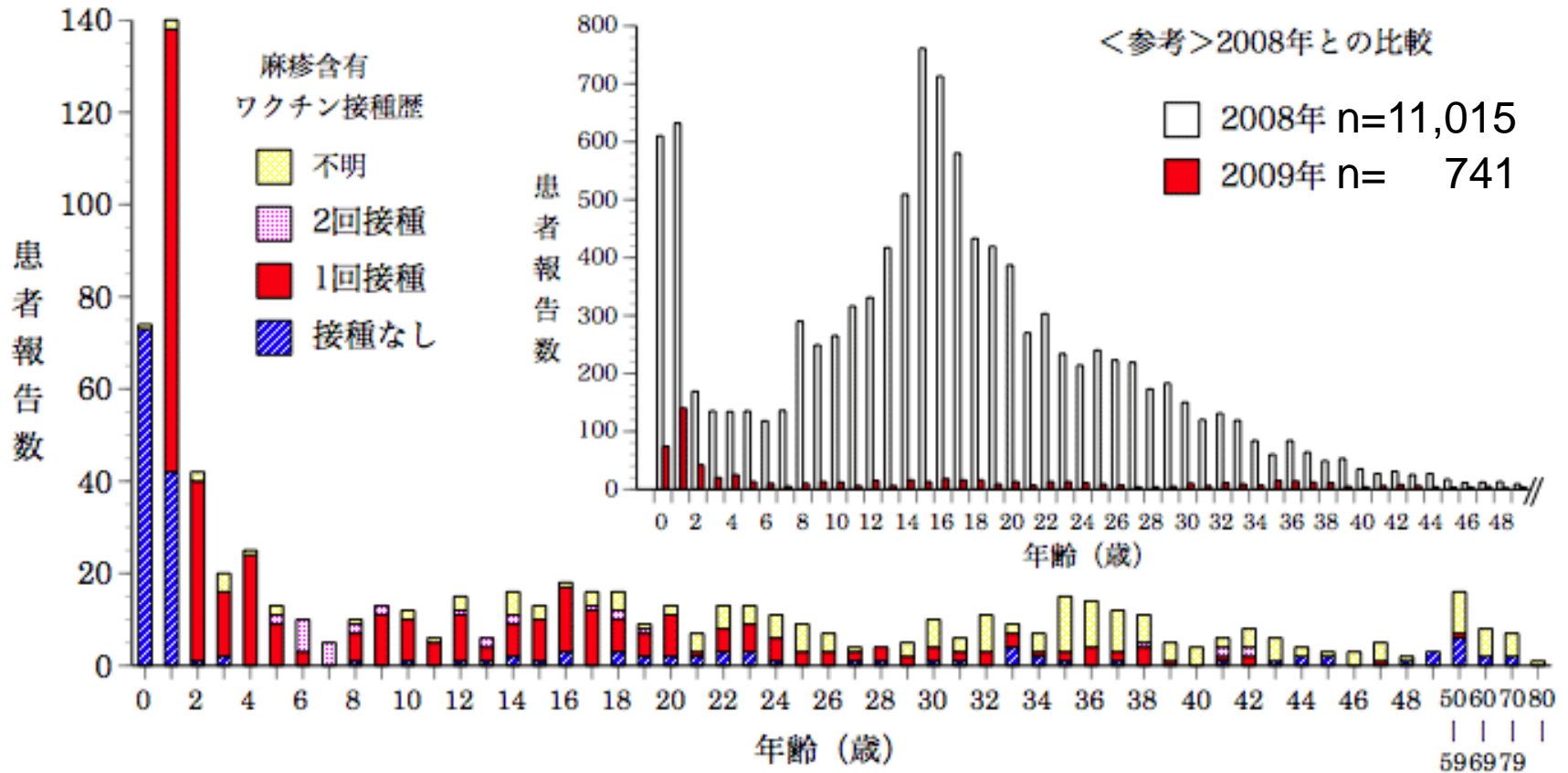






# 年齢別接種歴別麻疹累積報告数

図3. 麻疹患者のワクチン接種歴別年齢分布, 2009年



(感染症発生動向調査: 2010年1月7日現在報告数)

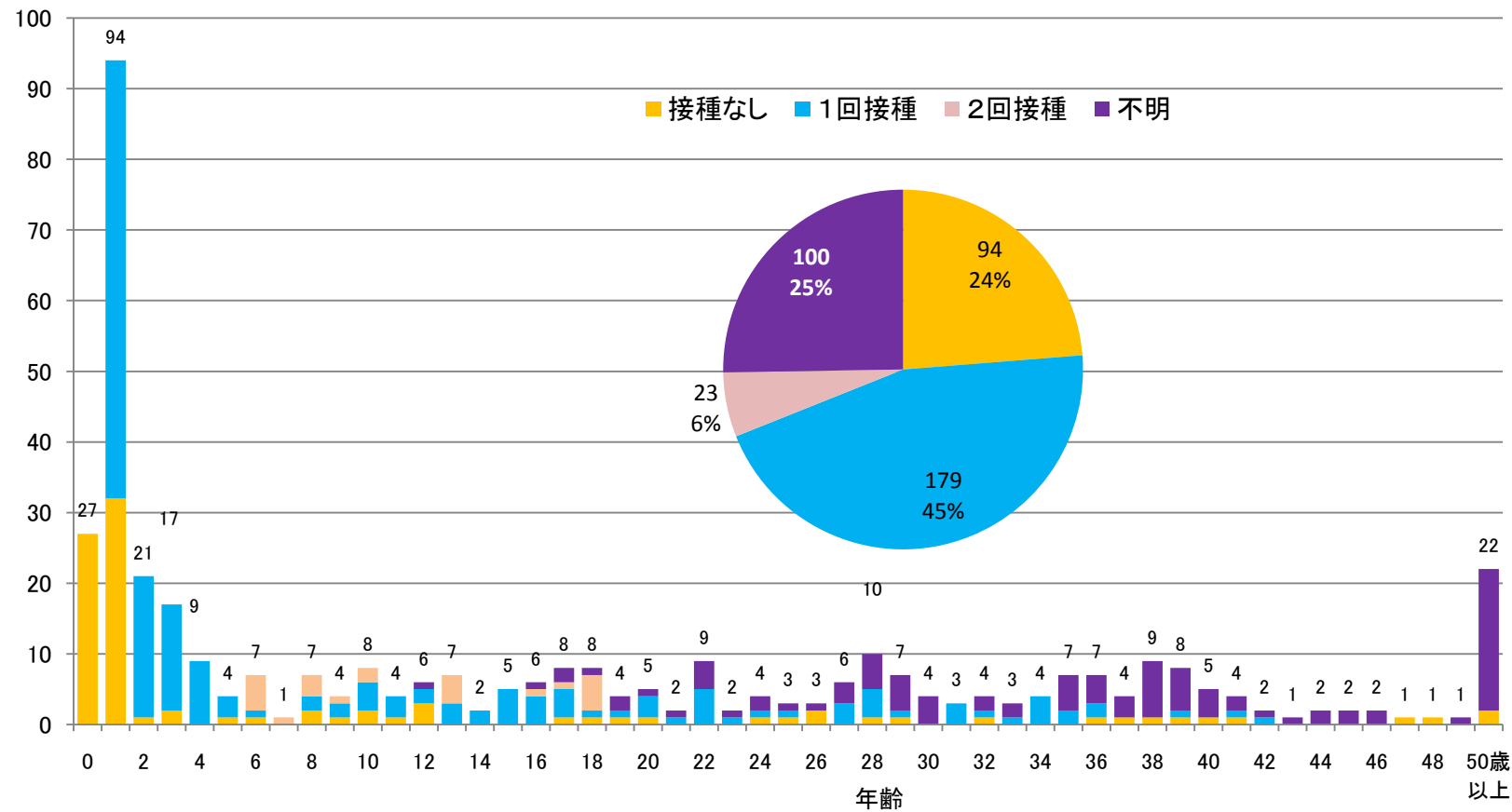


Infectious Agents Surveillance Report



# 年齢別接種歴別麻疹累積報告数 2010年第1週～40週 (n=396)

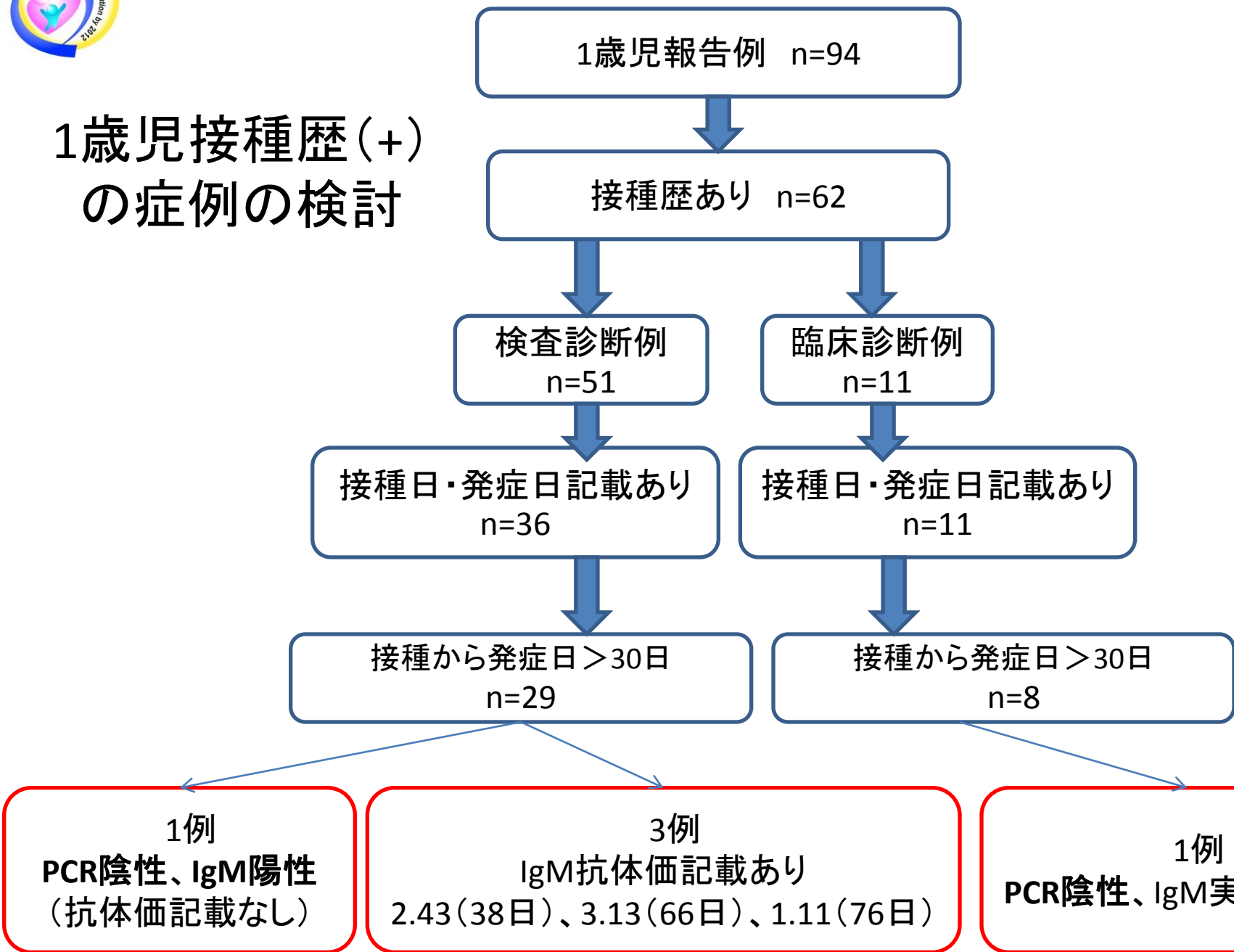
報告数



感染症発生動向調査 10月13日現在

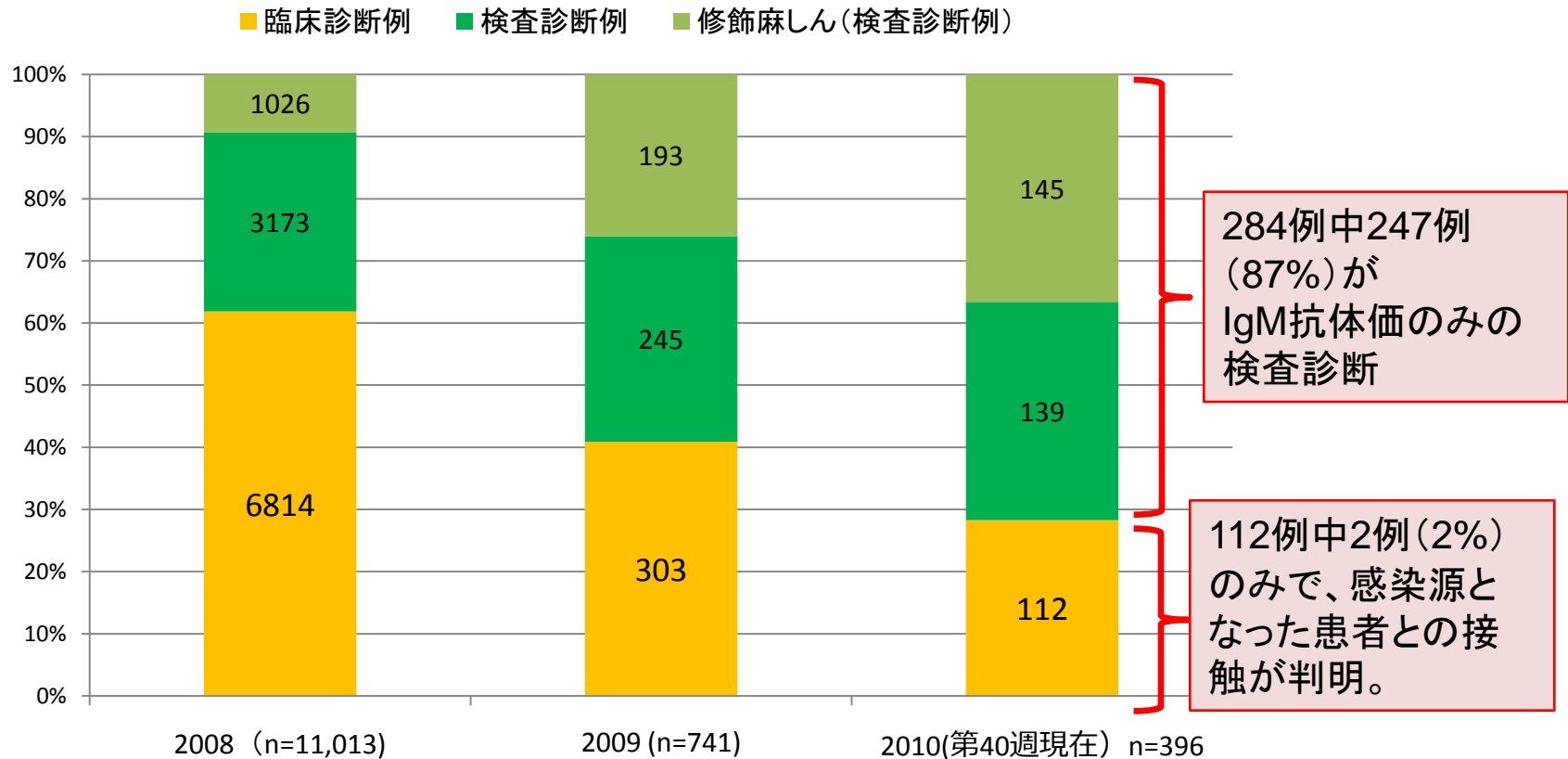


# 1歳児接種歴(+) の症例の検討





# 病型別麻疹報告数・割合の推移 2008～2010年第40週





## 麻疹輸入例（感染地域が国外と報告された症例）

	2008年	2009年	2010年*
輸入例 (n、累積報告数 に占める割合%)	27(0.3)	17(2.3)	18(4.6)
遺伝子型判明例 (n、輸入例に占め る割合%)	0(0)	1(5.9)	4(22.2)
累積報告数	11,015	741	392

\* 第1～40週まで



# 麻疹輸入例

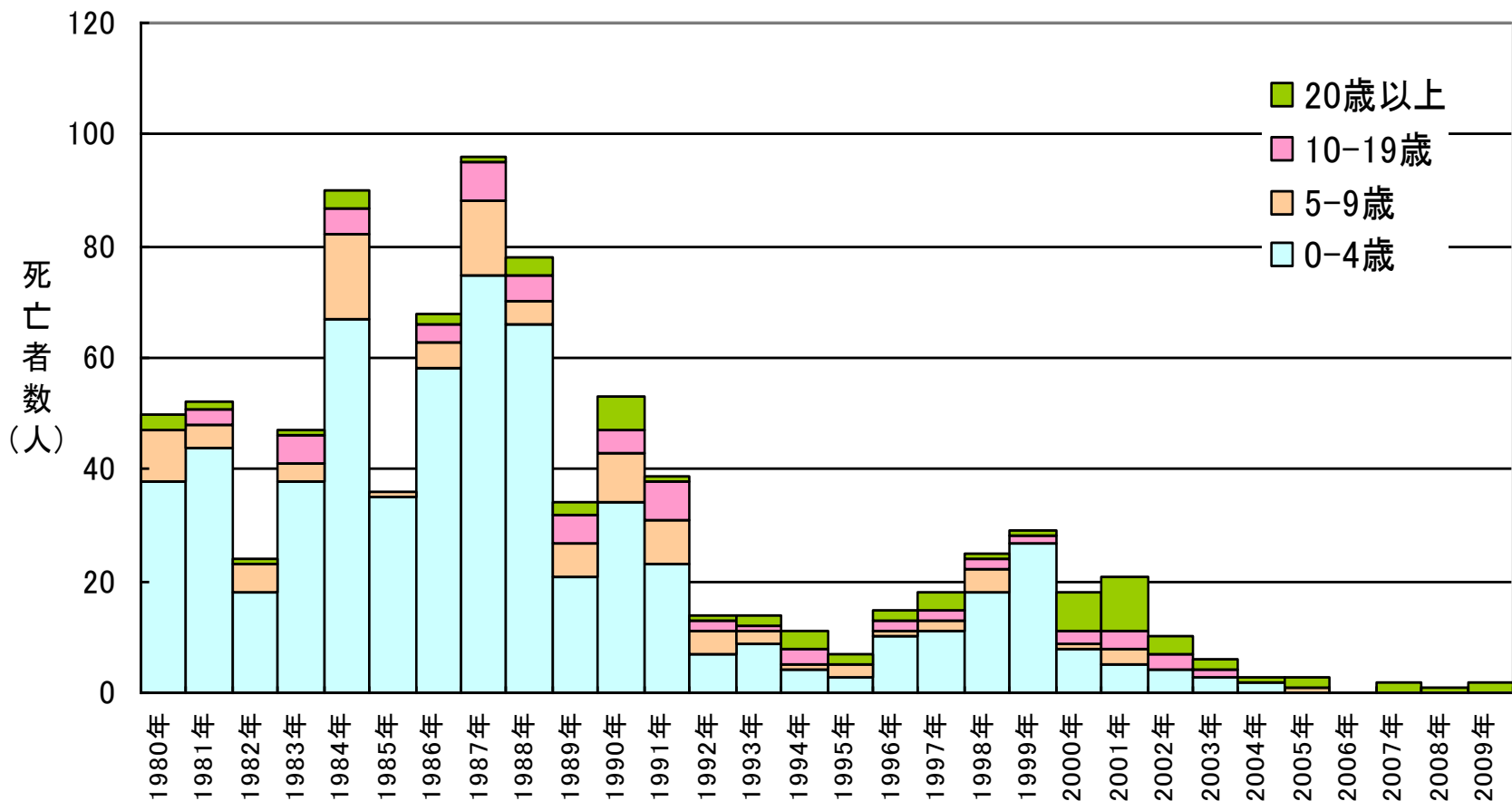
## 2010年第1～40週 (n = 18)

感染推定地域	報告数 n=18	遺伝子型判明例 n=4	遺伝子型
フィリピン	7	2*	D9
中国	6	1	H1
インド	1	1	D8
カンボジア	1	0	
ベトナム	1	0	
台湾/フィリピン	1	0	
イタリア	1	0	

- \* { 1例: フィリピンより帰国の8歳児 (0歳児に麻疹と診断され接種歴なし)  
1例: フィリピンより帰国の1歳児 → 日本国内で姉に感染 (D9)



# 麻疹が死因となった死亡者数 1980-2009年(人口動態統計より)



1991年までは毎年40例前後、1992年～2001年には20例前後の死亡者が報告されており、5歳未満の小児が中心にあった。幸い、近年、麻疹による死亡は減ったが、その多くが成人。



# まとめと今後の課題

- 2010年第40週までの累積報告数は、2008年の同時期と比較して96%減少し、396例であった。
- 2008年まで好発年齢層は10代が中心だったが、2009年以降は0～1歳が中心である。
- 地域での流行が認められなくなり、報告例のほとんどが、感染源不明の孤発例となっている。
- 「輸入例」が相対的に増加している。
- 検査診断例が60%を超えるようになったが、IgM抗体価のみで診断されている症例が87%を占める。弱陽性の場合の判断など、診断に難渋する例が相対的に増えている。
- PCR検査が陰性であっても、IgM抗体価弱陽性という結果で検査診断例として報告されている例が少なくない〔記載されているだけで9例(検査診断例の3%)〕。

→ 正確な検査診断例が報告される仕組みが必要